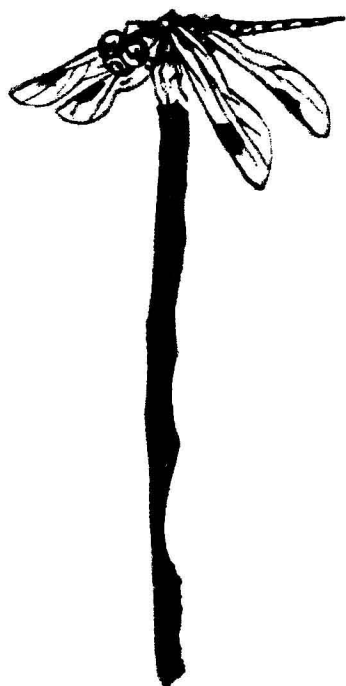




親 鸞

第三卷



吉川英治

光風社版

親鸞

第三卷



昭和三十三年一月二十五日 印刷
昭和三十三年二月五日 発行

定価 二五〇円

著者 吉川英治
発行者 豊島清史
印刷者 菅生定祥

発行所

株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話 東京 (29) 〇二三八番
振替口座東京 五六五二六番

乱丁落丁は御取替いたします

目次

戀 愛 篇・續

岡崎の家

火焰舞ひ

春信佳便

同 車 篇

熊野犬

不退の輦

淨土萬華

法 敵 篇

氷柱の下

春 雷

四 元 九

二 〇 九 七

二 四 三

悪
人篇

宣戦

二五

沙門の妻

二六

輦を焼く

二七

風やまず

二八

松蟲と鈴蟲

二九

空蟬

三〇

あの灯・この灯

三一

有閑宮

三二

脱走

三三

葉隠れの花

三四

火と火

三五

裝
幀

關
野
準
一
郎

親

鸞

第三卷

戀
愛
篇
續

岡崎の家

一

岡崎の草庵の地は、松に囲まれた林の陰で、その松のあひだから白河の流れが透いて見えた。うしろは、神樂岡の臺地である、近衛坂を下る人の姿が、草庵の臺所から小さく望まれるのであつた。

緯空は、毎日、その坂を越えた。吉田山から鳥居大路へ出て、吉水の禪房へ通ふことが、どんな風雨の日でも、休みなき日課であつた。もちろん、炊ぎの事も、朝夕の掃除も、まつたく一人でするのであつて、まだ算が引いてないので飲水は白河へ出て汲んで来る。

冬空の星を仰いで、吉水から歸つて来ると、いつも夜はかなり遅くなつた。それから薪をくべたり炊きをしたりするので、寂として獨りで粥をすゝる頃には、もう、洛内のすべての灯が消えて、天地の中には、こゝに粥をすゝる獨りの彼ののみが起きてゐるのではないかと思はれるやうな時刻になつてしまふ。

『はての?……』

或る日の夕方である。緯空は、草庵の戸を開ける前に、ふしぎな思ひに打たれて邊りを見廻した。今朝、庵を出る時は、落葉で埋まつてゐる程だつた門口が、きれいに掃かれてゐて、しかもその落

葉まで一所に集めて焼いてある。

裏へ廻れば、水桶には水が汲みたまへてあるし、板敷も拭き潔めてあるではないか。又、屋内へ入つて見ながら、緯空は更に眼をみはつてしまつた。燭の灯皿には、油がつきいれてあつて、付木の火を移せば足りるばかりになつてゐるし、夕餉の膳までもそこに出来てゐた。

『誰であらう』

と、考へこんだ。この草庵へ移る時に、實直に手傳つてくれた近くの農家の夫婦か——でなければ聴法の席へ来るうちの信徒の者か。

『いぶかしい』

誰を擧げてみても、思ひ當る者はなかつた。同時に又、その人の思ひ出せないうちは、この夕餉の箸も、取つてよいか悪いかに迷はずにゐられない。

だが、行きとどいた細い心づかひは、すべて、好意の光であることに間違ひはない。その好意に對して、徒らな邪推や遲疑を抱くべきではあるまい。緯空はさう解して、箸を取つた。

翌る日もさうだつた。次の夜も歸つてみると草庵は清掃されてあつた。

そのみではない。薄い夜の具に代つて、べつな寝具が備へてある。決して、ぜいたくな品ではないが、垢のにはひのないものであつた。

それは、幾日かの謎だつた。しかもほのかに、女性のにほひの感じられる謎なのである。

陶器一つにも、身に着ける肌着の一針にも、絶対に、女性の指に觸れないものゝみで潔淨を守つてゐる僧の生活なのである。どんな微かにでも、女粉に觸れたものはそれを感じる。なやましい移り香を感じる。

綽空は、その夜の具にくるまれて、この幾夜かを、ふたゝび夢魔に襲はれとほした——いや魔といふべくは餘りに和らかい惱ましきである。梨の花の甘い香ひにも似てゐる、木蓮の肌目の細かな觸感にも似てゐる、どうしても、この蒲團の綿は、女手でつゝまれたものである——女の眞ごころのやうに綿が温い。若い一寒僧には、餘りに温かすぎるのだつた。

然し、謎は謎のまゝ、幾日かつい過ぎた。さういふ詮議だてさへしてゐる違のないほど現在の綽空は、吉水の法門がその日く心の梁であつた、張りつめてゐた。

その日は、どういふ事もなく、信徒たちの集まりもなく、師の法然上人も不在でありするので、まだ陽の明るうちに、めづらしく岡崎の草庵へ綽空は歸つて來たのである。

すると、草庵に近い松林の小徑で、ひとりの被衣の女に行き會つた。ちらと、樹の間にそれを見た

とたんに、綽空は、どきつと、妙なものに胸をつかれた。

（あの女だ）

と、いふ囁きがのぼつて、何か犯してゐる罪に耳でも熱くなるやうな動悸が打つてくる。

さういふ軽い狼狽を、綽空は、その女ばかりでなく往來でゆき會ふ女性にもよく覺えるのだつた。その度ごとに彼は、自分の道念の未熟さを悲しむのであるが、二十年の難行道も、新しく享けてゐる易行道の法の慈雨にも、これだけはどうにもならないものを感じるのである。さういふ鍛へのある自分と、女にときめきを覺えさせられる刹那の自分とは、まったくべつな者のやうにしか思へなかつた。(もし……)

と、よほど、彼は聲をかけてみようと思つた。松落葉のうへへ音もなく歩いてくる女性は、ほかに避ける道もないので、彼の法衣のそばを、そつと、摺れ交つて行かうとするのである。

が——女は、やゝ姿態を曲げてわざとのやうにその時被衣を横にして顔をかくして通つた。で、綽空も、

(どこかで見たやうな?)

と思ひつゝ、ことばをかけずに行き過ぎてしまつた。

十歩ほどあるいてから振向くと被衣の女も、ちらと此方を見て足ばやに行つてしまつた。懷中から小鳥でも逃がしたやうに、綽空は心をひかれて、その影が、白河の河原の低い蔭になつてしまふまで佇んで見送つてゐた。

三

——なぜあの時よびとめて、名だけでも訊いてみなかつたか。

緯空は、草庵を戸ざして、夜の孤寂に入つてからも、瞑想の澄心を、そのみに結ばれてしまふことを、何うしようもなかつた。

ほとくと外を軽く打つ者がある。また悪戯な林の獣どもかと、暫くすてゝおくと、

『庵の主はお留守か』

明らかにさう云ふ。

『――燈火の影を見うけて立ち寄つたものでござる。苦しうなくば宿をおかしくださるまいか。決して、怪しい者などではありません』

緯空は起つて、

『旅のお方か』

『されば』

と、戸の外で言葉をうける。

『さすらひの琵琶法師です』

『たと今、あけて進ぜよう』

戸を開けると、星明りの下に、一面の琵琶を負つた盲人が杖ついて佇んでゐた。こなたから聲をあげぬうちに、

『はての？』

盲人は小首をかしげて、

「あなたは、範宴少僧都ではないか」

「おう、加古川の峰阿彌どのか」

「やつぱり範宴どのか」

「今では念佛門の法然上人の許へ参じて、緯空と名を改めて居りますが、仰せのごとく、その範宴です」

「さうく、さういふ噂は疾く聞いてゐた。……然し、御縁があるのぢやのう、何でも、この邊に住まはれてゐるとは承つてゐたが、よもやこの庵が、あなたのお住居とは思はなかつたに」

「まづ、お上りなさい」

緯空は、取りとめのない雑念から救はれたやうな氣がして、峰阿彌の手をとつた。

松の實を、爐に焚き足して、

「お久しいことでしたな」

『まことに』

峰阿彌は、琵琶の革緒を解いて後へ置きながら、

『あなたは、ずんとお變りになりましたな。お體も健かになられた。お心も明るくなつた。そして眞向きに現在の御信念に坐つて居られる。祝着にたへませぬ』

と、見えるやうなことを云ふ。

けれど緯空は、こゝ法師のすさまじい『勘』の力を知つてゐる。目あきに見えないものすらこの標